

漁具と漁法①

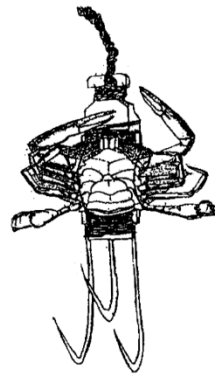
国内でも有数の漁場である伊勢湾には、数多くの生物が生息している。海という自然の中で行う漁は、人間と海の生物たちとの知恵くらべであった。

漁具や漁法には、釣ってとるもの、仕掛けてとるもの、突いてとるものや干潮時に海に入って捕獲するものなど、実にさまざまな漁法がある。漁師は、対象とする魚種によって仕掛けや餌などをかえ、季節や時間帯、操業場所などによっても、漁具や漁法に工夫を凝らし、改良を加えていった。

—釣る—

●タコ釣

2～3本の鉄の針に石や鉄のおもりをつけたもの。モガニを縛って餌とし、タコを釣った。小型のものはイダコ用で、大根やらっきょうなどの白いものを餌とした。



タコ釣の仕掛け



フグ釣の仕掛け

●フグ釣

竹串にイワシやアジを刺し、フグを釣った。

●マタカ釣……マタカは出世魚であり、成長するにつれ、セイゴ、マタカ、スズキと呼び名がかわった。餌にはエビを使い、魚がかかりやすいよう針を2本にしたものがある。

●ボラ釣……餌の団子を針の中央に固め、青竹の先に糸を付け、船の横から差し出して釣った。ボラは出世魚であり、体長80cmにもなった。

●ばけ（擬餌針）

本物の餌を使わず、餌となるべき魚やエビなどに似せて作った釣針。漁師の手作りで、木や鳥の羽毛、鉛、骨、象牙、貝殻などを材料とした。



エビ形

●釣竿……竹製で、主にハゼ、ウナギ、セイゴ用。釣竿の先につけた鈴は、魚がかかると鳴るようになっている。

●ちょうちん……まき餌を入れ、魚を寄せるのに用いた。

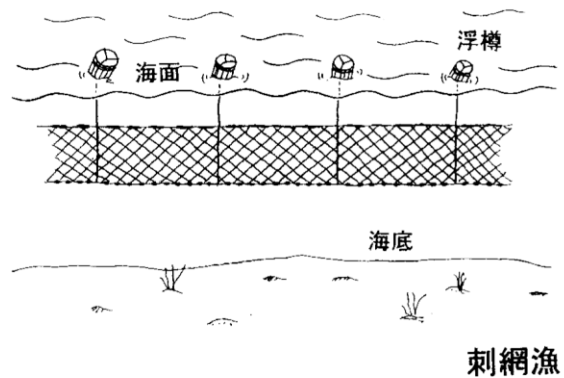
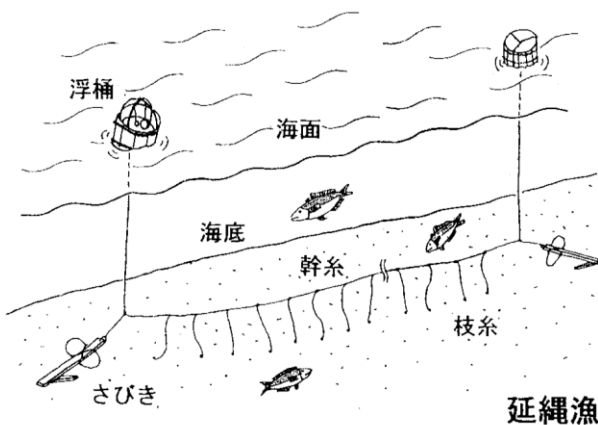
●天秤……2丁釣用で両端に釣糸をたらして使った。

●ドンタはずし…ドンタ（ヌメリゴチ）は、粘液でぬるぬるして釣針をはずすのに苦労するので、これを用いて魚の口から釣針を抜いた。

ぎよ ぐ ぎよ ほう 漁具と漁法②

— し か け る —

魚の習性をうまく利用した「仕掛ける」には、延縄漁、タコつぼ漁、刺網漁、がごじなどがある。延縄漁は、長縄船に乗り、長い幹糸に、等間隔に針の付いた枝糸を縛り付けて海中へ投入するもので、この地域で盛んに行われていた。また、岩礁地帯ではタコが多く捕れた。岩の裂け目や穴になった部分を巣とするタコの習性を利用したタコつぼ漁には、常滑焼きの壺が多く使われた。



- かわ……ながの(延縄)を整理して入れておく曲物。上部の縁に針をかけた。
- 浮桶……延縄漁や刺網漁の基点となる浮。波に揺れると音になり、仕掛けの位置が確認できた。
- 標識灯……浮桶と同じであるが、ランプの光で仕掛けの位置を示した。
- 浮樽……刺網の浮として用いたり、仕掛けの目印として使用したもの。底に水抜きのための栓がついている。
- さびき……延縄漁の起点や終点に用いた錨。海中の遺失物を探るのにも使った。
- タコつぼ…短胴のものから細長い筒型の壺へと改良された。蓋付きのものは、餌でタコをおびきよせ、タコが入ると蓋が落ちるようになっている。壺に枝網を結んだものを親網につないで、延縄式に海底に沈めた。
- がごじ……細長く割った竹で編み、延縄式に海底に入れて、ウナギを捕った。
- ガニたも…雑魚を餌として海底に沈め、ワタリガニをおびき寄せて捕った。カニが逃げないように周囲を上へ曲げたものや、カニが入ると二度と出られなくなるような仕組のがごじ型がある。